

古典期からヘレニズム期の ギリシア劇場の客席の平面形について

渡邊道治*

On Plan of arc-formed *cavea* of the Greek Theatres in the Classical and Hellenistic period (until the early first century B.C.)

by
Michiharu WATANABE

(Received: October 31, 2017)

Abstract

In this paper, I draw out the following features on the plan of curved *cavea* of the Greek theatres in the period from the introduction of a circular planed orchestra into the Greek theatre, i.e. sixth-fifth c. B.C. to the early of the first century B.C. by analyzing the 93 remained theatres. (1) In the plans of *cavea* there are six groups which have different form enclosing the orchestra and different degrees of emphasizing the centrality of the space of orchestra, and the all six groups were used in the fourth century B.C.. (2) In the period of the third century B.C. to the early first century B.C., we cannot find out any new creative plan of *cavea*, (3) Two major *cavea* plans were mainly used. One is a plan which has circular over a little semicircular and the *analemmata* is placed toward the center of orchestra. The another is a plan which has U-shaped or elliptical and has under 220 degrees between the two lines connecting the center of the orchestra and the edges of undermost *cavea* at each side. (4) For the cave of the Greek theatre at this period, there are two points, i.e., One is keeping more many seats around the orchestra and the another is minimalizing the space with worse condition to viewing both the orchestra and stage.

Key Words : *cavea*, Greek, Hellenistic, theatre, plan, typology

[1]研究の目的と方法、資料について

ギリシア・ローマ時代に形成された劇場建築は基本的にオルケストラ、客席、舞台建築の3つの構成要素から成り立っている(図1)。ソリコス Thoricos の劇場(図2)に見られるように、紀元前6~5世紀頃の直線の階段の座席からなる客席とその前に置かれた明瞭な平面形を持たないオルケストラのみから構成される最初期の段階から、劇場建築の定型化への次の一步は円形のオルケストラの導入であった。⁽¹⁾それを契機としてオルケストラ周りの客席の平面形には円弧が用いられ、さらに舞台建築が付け加わることによって次第に劇場建築としての形態を整えていった。

この劇場の客席については、いわゆるギリシア・ヘレニズム時代の平面とローマ時代の平面の2つに大別され、一般的にはギリシア劇場もしくはギリシア型劇場と、ローマ劇場もしくはローマ型劇場と称されている。本稿で扱うギリシア・ヘレニズム時代の平面についても既往研究の項で述べるような様々な研究がなされてきたが、そこにはいくつかの課題を抱え、結果としてこの時期の客席平面の変遷そのものが曖昧なまま残されてきた。また、拙稿でもギリシアからローマ時代全般を通じての248の劇場を対象として、その客席平面のタイプ分類の結果を報告したが、大まかな分類を行なったのみで、考察が不十分であり、そこから客席平面の展開の方向性は示されていない⁽²⁾。

*経営学部教授

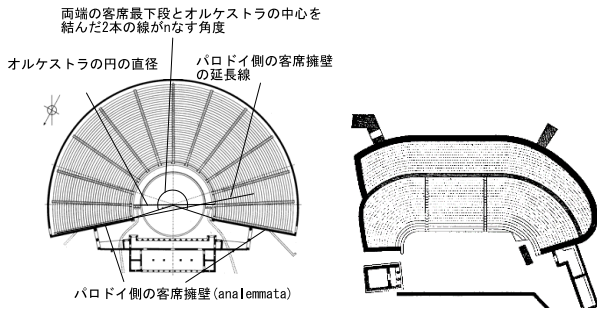


図1 各部の名称

図2 ソリコスの劇場

そこで本稿の目的は、円形のオルケストラが導入された以降のギリシア・ヘレニズム時代の劇場の客席平面の変遷を明らかにし、そこからこの時期の客席平面に見られる特徴を示すことである。そのために、既往研究の概要と課題点を記し、次にウィトルウィウスの劇場に関する記述について触れ、その後に独自の基準にもとづく客席平面の新たな分類の方法を提案し、その新しい分類法から現存遺構の客席平面を6つのグループに分け、その結果の検討によりギリシア・ヘレニズム期の劇場客席の平面の変遷とそこに見える特徴を抽出する。

本稿で分析対象としたのは、円形のオルケストラが導入された時期以後、すなわちオルケストラ周りに円弧状の曲線を用いた客席平面が出現以降から紀元前1世紀初めまでに建設された劇場で、かつその客席平面がある程度判明している現存遺構93例を対象とする。分析対象を紀元前1世紀初めまでとした根拠は、この時期になるとイタリアの地で後のローマ劇場の萌芽期にあたる新たな客席平面が形成されるようになり、従来の劇場平面とは異なる遺構が出現することになるためである。

[2] 既往研究について

ギリシア・ヘレニズム期の劇場の客席平面の形態に関してのこれまでの研究を見ると大きく2つに分かれる。ひとつは現存遺構の平面を比較検討し、そこから共通する平面形態上の特徴をもとに分類し、それらの特徴を導き出す方法である。もうひとつは、客席平面を構成する要素を一旦抽出し、その論理的に組み合わせによって生み出される平面形態に現存遺構を当てはめて分類する方法である。

最初の現存遺構の客席平面の比較検討によって平面形態を分類する手法は多くの研究者が手がけており、オルケストラを囲むその平面形態については結論に達していると見て良い。つまり、オルケストラを囲む客席が作り出す平面は基本的に単一の円弧によるもの、半円の両端部から平行に直線が伸びる、いわゆるU字形のもの、異なる曲率の円弧を組み合わせた楕円形状のものの3つに

絞られることである。このような捉え方は19世紀末以来、ドルプフェルド(図3)、フェヒター、そしてディルクと受け継がれ、さらにその後のディンズモア、ビーバー、さらにロッセツトやミーテンスへと継承されてほぼ確立している⁽³⁾。この分類に大きな役割を果たしたのがウィトルウィウスの劇場に関する記述、エピダウロスの劇場とアテネのディオニソス劇場の現存遺構である。ウィトルウィウスの記述とエピダウロスの劇場は異なる曲率の円弧を組み合わせて楕円状の平面の存在を文献と遺構の両面から立証し、ディオニソス劇場はU字形平面の存在を見せているためである。

しかし、これらの既往研究でしばしば問題となっているのは異なる曲率の円弧を組み合わせた楕円状の形とU字形が混同され、一括して馬蹄形と扱われたり、特に根拠もなく馬蹄形とU字形の言葉を混在して使われたりしていることである⁽⁴⁾。そうした混在の背景にあるのは、楕円形状とU字形と形態の違いが劇場の客席の役割や空間の質にどのような影響を与えるがあまり考慮されていないために、単なる形態の違いのみに関心が向けられていることが理由として考えられる。

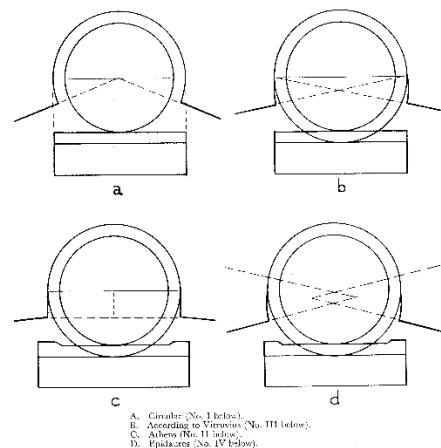


図3 ドルプフェルドによる客席平面分類図

それに対して、近年フレデリクセン⁽⁵⁾が98の劇場の現存遺構を対象としてヘレニズム期までの劇場の客席の平面をオルケストラの囲み方の観点から、規範となる平面とそのヴァリエーションという捉え方で8つのタイプに明瞭に分類し考察している。この8つの中には直線をなす階段状の座席のみからなる矩形平面のタイプやソリコスにみえるような直線状の座席で端部が若干湾曲する平面タイプの2タイプも含まれている。彼の分析では残りの6つにタイプの中に不規則な形態と半円に満たない扇形の特殊なタイプが含まれ、結果として円弧をなす客席の平面を4つに分類したことになる。その4つとは、半円より大きな円弧からなり、analemmata(この言葉に対し

て現在のところ適切な訳語はないため本稿では、以後、「パロドイ側の客席擁壁」と記すことにする)(図1参照)がオルケストラの中心に向かう平面、ディオニソス劇場のようなU字形平面、楕円形平面、そして半円である。この楕円形は従来の異なる曲率の円弧を組み合わせて作られる形を指している。ここでは半円以上の円弧の平面、U字形平面、楕円形平面、半円と明瞭に区別して混在することなく分類されている。また、彼の研究の成果のひとつとして、分類された平面タイプがすべて紀元前4世紀にすでに見られると指摘していることである。

これらの研究は劇場の客席平面を形態の上から分類でき、その特徴を一見捉えているように見えるが、その手法において客席の平面を決定づける重要な要素が欠落している。すなわちパロドイ側の客席擁壁である(図1参照)。客席平面はすでに提案されてきた円弧状であれ、U字形であれ、上記の客席擁壁の配置はオルケストラ周りの客席の広さにも、オルケストラ部分への観客の意識の集中の具合と囲まれた空間の求心性も、また舞台の見えにくい座席部分の場所や広さにも決定的な影響を与える。その配置に関する視点はわずかにすでに指摘したフレデクセンのU論文の中で円弧状平面の一つのタイプに部分的に取り込まれているだけである。そのために、ギリシア・ヘレニズム期の客席において何が重視され、その結果どのような変遷を経たのかが曖昧なままである。

もうひとつの分類方法である構成要素の理論上の組合せによって生まれる形態から平面タイプを作成し、そこに現存遺構を当てはめてみる手法がブレッサンのによってギリシアのアッティカとペロポネソス半島のヘレニズム期までの劇場を対象に行なわれている(図4)⁽⁶⁾。この方法では、理論上はありえるが実際には存在しない平面タイプも含めて、すべての分析対象の客席平面を分類することは可能となるが、そこから生まれた結果にどのような意味を読み取るかに課題が生じる。すなわち、分析する構成要素の選択が適切でないと単に分類することが目的となってしまう危険性が高い。ブレッサンの著書でもその傾向が見える。さらに、かつ彼女の考えには前述したパロドイ側の客席擁壁の向きが客席の中心軸に対して鋭角、鈍角、直角(つまり舞台に平行)の3つに分けて分類されているだけであり、その向きについては無頓着でそこにどのような意味があるかについて十分な考察が欠けている。また、残念ながら研究対象がギリシアのみに限定されているために、ギリシア・ヘレニズム期を通しての劇場客席についての結果を得ることができていない。

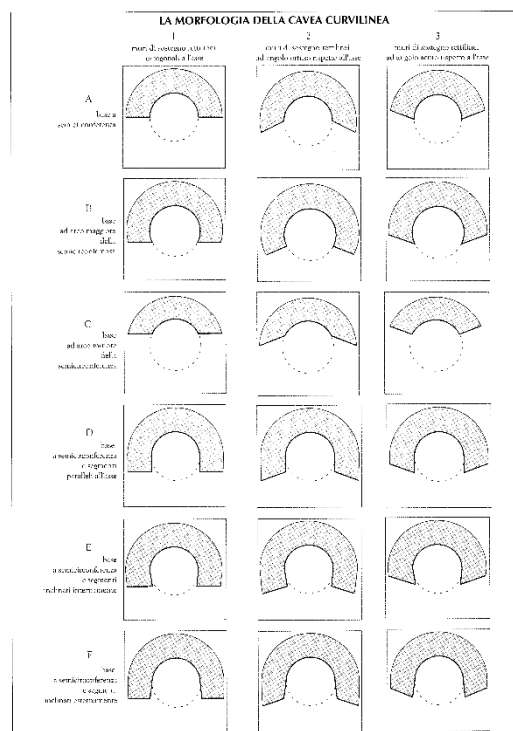


図4 ブレッサンの客席平面分類図

[3] ウィトルウィウスの記述について

ウィトルウィウスは彼の建築書の第五書、第7章でギリシア劇場の客席に関することも述べている(図5)⁽⁷⁾。その第1節でギリシア劇場では円が描かれ、その円の中心を通過してプロスカエウムと同じ方向に平行線が引かれ、それが左右で先の円周線を切る点を中心として円の直径を半径として円がそれぞれプロスケニウム側に向かって描かれると、述べている。続けて第2節で、ギリシア人は3つの中心を使ったこの作図法によってもっとひろいオルケストラをギリシア劇場は持つと、記述している。つまり、ギリシア劇場についてウィトルウィウスの述べることから以下の3点が明らかとなる。まず、ウィトルウィウスが述べるオルケストラを囲む客席の平面は2つの異なる半径の円弧を組み合わせた馬蹄形平面である。次に、その馬蹄形平面において180度を超える長さは内接する正方形の配置によって決定されているが、そこから伸びるパロドイ側の客席擁壁の向きはどのようなものかについては全く触れられていない。つまり、この擁壁の延長戦がオルケストラの中心に向かうのか、あるいは左右の先で円周線を切る点に向かうのかについては論点とされていない。最後にこの平面の決め方がオルケストラを広くする結果を生むと考えている。

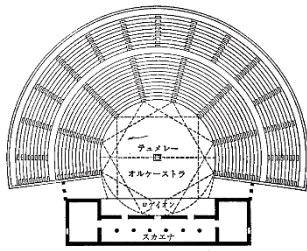


図5 ウィトルウィウスのギリシア劇場平面

[4]客席の平面の新たな分類の仕方について

既往研究の概要ですでに指摘したように、劇場客席の平面の分類ではオーケストラ周りの形態のみが対象であり、その形を形成するもうひとつの要素であるパロドイ側の客席擁壁の配置について考慮されていない。そこで新たな平面の分類法をここに提案する。提案する分類法は、客席平面の特徴とその違いを知るために、オーケストラの囲み方と観客の意識がどこに集中するように意図されているかの2つの観点におく。そのために、分類法の基準はオーケストラ周りの客席の平面形とパロドイ側の客席擁壁の延長線がどこに向かって配置されているかの2項目とする。

このオーケストラ周りの客席の平面形は、オーケストラの囲み方、観客席の広がり、舞台と客席が見える観客席の広さや舞台からの距離を決定づけている。これに対し、パロドイ側の客席擁壁は客席を支える分厚い壁で構造的にきわめて重要であるだけでなく、直線をなすその壁がどちらに向かって配置されているかが客席で囲まれたオーケストラ部分の空間の特性に大きな影響を与えている。パロドイ側の客席擁壁の向きを調べる際に、その基準線は客席両端部の階段状通路の中心線とするが、その他にその客席両端部の階段状通路の両側線、稀にその客席擁壁の内側および外側の線も用いる。

この2つの要素をもとに分析対象の劇場客席の平面を図6のように分類する。まず、オーケストラ周りの客席の平面は一つの円がなす円弧からなる場合(C)、2つ以上の異なる曲率の円弧が組み合わさって作られた楕円状の馬蹄形の場合(D)、円弧の両端から平行な直線が延びるU字形の場合(U)、それ以外(半円形と特殊形)の4つに分類される。パロドイ側の客席擁壁の向きについては、その延長線が客席あるいはオーケストラの中心に向かう場合(①)、客席の円の中心を通り舞台に平行な直径と客席擁壁の延長線がオーケストラ内で交差する場合(②)、前述の交わる点よりもより外側で、つまりオーケストラの外側の客席内で直径の延長線上で交わる場合(③)、舞台と平行な場合(④)、の4つである。

オーケストラ周りの客席の4つの平面形(C、D、U、

その他)とパロドイ側の客席擁壁の4つの向き(①～④)の組み合わせから、客席平面は14のタイプに分類される。そこで生まれた客席平面においては、④から①になるほど観客の視線あるいは意識はオーケストラ部分、とりわけオーケストラの中心に集中する、きわめて求心性の高い客席空間となる。同じ求心性の高い客席空間はU字形よりも異なる曲率の円弧の組み合わせた形が、さらにそれよりも単一の円による円弧のほうがさらに強くなることを示している。

さらにオーケストラに面する客席の広さや舞台の見え易さの観点からすると、U-④やD-④はオーケストラ周りの客席の面積は広くなり、オーケストラも舞台もすべての席からほぼ見ることができる。またC-④平面でも舞台とオーケストラをすべての座席から見ることが可能で、オーケストラ周りの客席の面積はかなり広くなる。一方C-①の平面になるとオーケストラ周りの客席の面積はあまり広くなく、オーケストラ部分はよく見えるが、舞台がよく見えない座席が生まれる。しかし同じC-①のタイプであっても客席最下段の両端部とオーケストラの中心を結んでできるオーケストラ側の角度が大きくなるほど、オーケストラに面する客席の面積は大きく、オーケストラの中心に向かう意識は強くなるが、逆にオーケストラのみが見え舞台を見えない座席が占める部分が広くなる結果となる。

		オーケストラ周りの客席の平面形		
		単一の円による円弧	異なる曲率の円弧の組合せ	U字形
パロドイ側の客席擁壁の向き(客席擁壁の延長先)	の中心へ	 C-①	 D-①	 U-①
	直径と交差	 C-②	 D-②	 U-②
	直径と交差	 C-③	 D-③	 U-③
	舞台に平行	 C-④	 D-④	 U-④

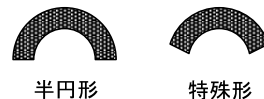


図6 劇場客席平面の分類図

[5]6つの客席平面形グループとその特徴

オルケストラ周りの客席の平面とパロドイ側の客席擁壁の配置の仕方に基づき新たな基準を使った分類法を提案し、それをもとに円形のオルケストラが導入された後の現存遺構の客席平面を分類した。その結果から紀元前5世紀から紀元前1世紀初めまでの劇場平面は6つのグループに大きく分けることができる。それら6つのグループの関係を表したものが図7である。この図では、横軸にオルケストラに面する客席面積の広さを示し、縦軸にはオルケストラと舞台がともに見えることを重視するのか、オルケストラを主に見ることを重視し、かつとりわけオルケストラの中心に対する求心性が高いのかを示している。図7中には客席平面の模式図と図6の客席平面の分類記号を表示している。客席平面の模式図では、白抜き図がパロドイ側の客席擁壁の延長線がオルケストラ

の中心に向かう場合、2つの網掛け図がその擁壁の延長線がオルケストラの中心には向かわない場合と舞台に平行な場合を示している。

第1グループの客席平面は、オルケストラ周りにある程度の客席面積を確保しつつもオルケストラと舞台の両方を全ての座席からできるだけ見えるようにした平面形態である。しかしながら、客席の両端部の上段部分には舞台が見えにくい座席が少し残る。これに属するのは本稿で提案した分類法のC-①とC-②およびC-③の一部の現存遺構である。すなわち、オルケストラを囲む客席の平面が半円よりやや大きく、パロドイ側の客席擁壁はオルケストラの中心に向かって配置されている。当然のことながら客席の階段状通路もオルケストラの中心に向かって配置されているので、客席全体はオルケストラの中心に向かってきわめて求心性高い空間が形成されている。

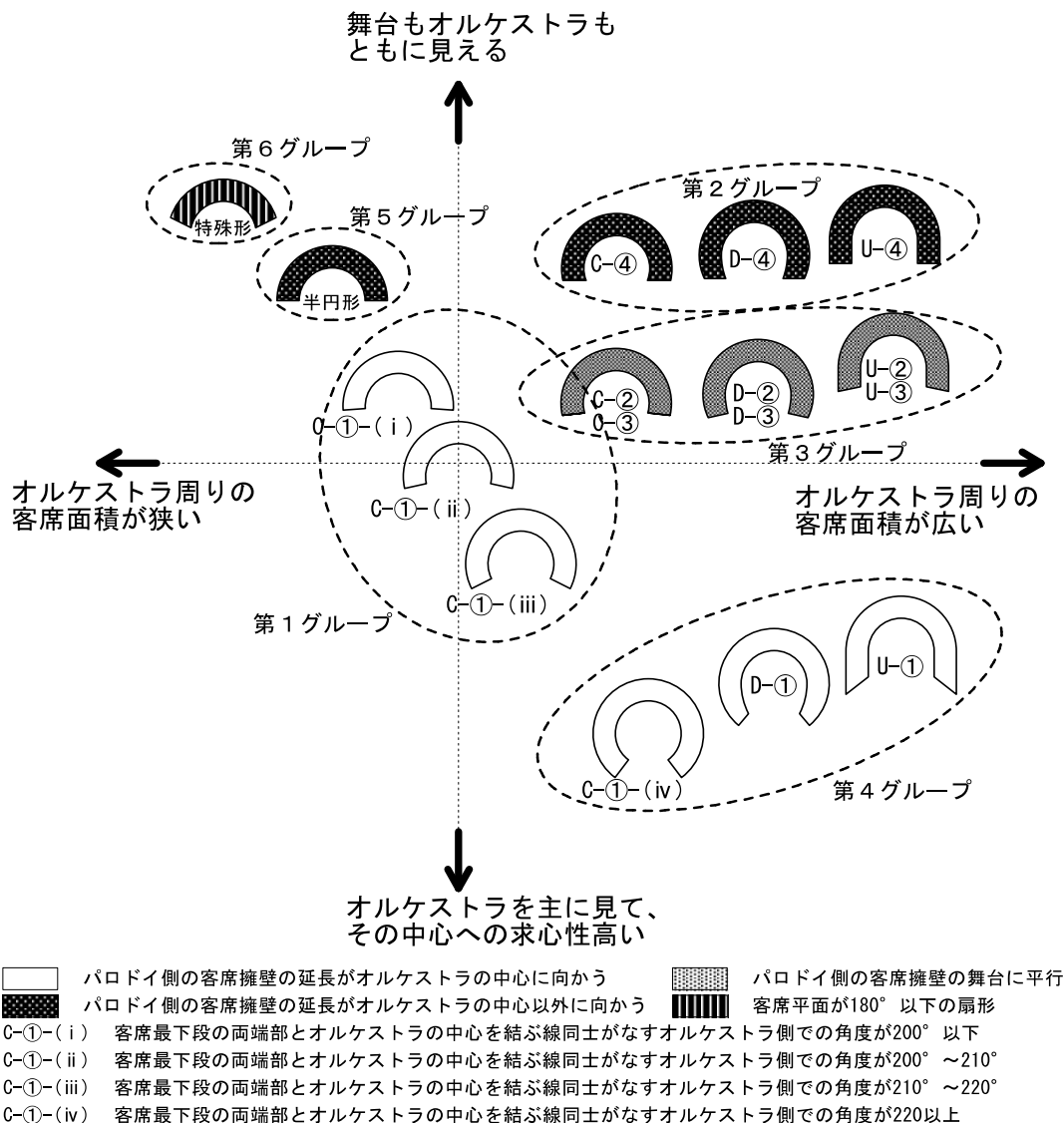


図7 劇場客席平面の関係

このグループに属する遺構は23例確認でき、分析対象の約1/4を占め、6つのグループの中でこの客席平面が第3グループと共に良く用いられたことが明らかとなった。アルバニアに1例、イタリアに1例、ギリシアに11例、トルコに10例であり、ギリシアと小アジアにほぼ集中している。また建設時期から見ると紀元前4世紀に3例、紀元前3世紀に5例、紀元前2世紀に8例、紀元前2世紀に2例、ヘレニズム時代に4例であり、紀元前4世紀以降継続して確認できる。つまり、紀元前330年頃とされるメガロポリス Megalopolis (図8)⁽⁸⁾などに見えるように紀元前4世紀にはすでに確認でき、それ以降継続して使われ続けた。

さらにこのグループの客席平面において注目すべき点は、半円を超過して円弧が描かれる範囲の大きさによって客席空間の質がかなり変化することであり、その相違と現存遺構の対応関係に注意する必要がある。すなわち、客席が開く角度が180°に近いほど半円形に近くなり、オルケストラに面する客席面積はそれほど広くないが、オルケストラも舞台も共に見ることができて、舞台の見えにくい座席部分は狭い。一方でオルケストラの中心に観客の視線と意識をある程度集中させることもできる。それに対して客席が開く角度が180°を超えて大きくなればなるほど、オルケストラに面する観客席の面積は広くなり、ますますオルケストラの中心への観客の意識は集中され、求心性の高い客席空間となる。それに反比例するように、ますます客席両端部ではオルケストラのみが見え舞台が見えにくい座席部分が大きくなる。

そこで、本稿ではこの第1グループに属する劇場客席で、円弧をなす客席最下段の両端部とオルケストラの中心を結んでできる2本の線が作るオルケストラ側の角度を表1にまとめた。この表に見えるようにその角度が200°以下が23例中の14例で、200°～210°が6例、210～220°が2例であった。図7にはC-①に(i)～(iv)の記号でその角度を10°ごとに区分して表示している。まず200°の角度は半円より左右側にわずかに10°ずつ大きいだけであり、図形上は半円にきわめて近い。たとえば紀元前330年頃とされるメガロポリス(図8)や紀元前3世紀のNea Pleuronでは両側の客席擁壁とオルケストラの中心を結んだ線がなす角度は190°ほどであり、ほぼ半円とみてもよい角度である。したがって、C-①に属する平面の半数が200°以下ということは、ほぼ半円に近い平面をなしていたといえる。

反対にこの2本の線がなすオルケストラ側の角度が半円よりかなり大きくなるとむしろ第4のグループに近づく客席平面となる。そうした例として紀元前2世紀に作られたカネア Cyaneae (図9)やテルメッソス Termessus

の劇場客席があげられる。この客席平面では上記の2つの擁壁の直線がなす角度が210°ほどになり、オルケストラに面する客席面積は広くなり、観客の視線はほとんどオルケストラに集中し、客席両端部の上方に近い座席からは舞台がきわめて見えにくくなってくる。

第2グループの客席平面は、オルケストラに面する客席面積をできるだけ広くしつつ、かつオルケストラも舞台もすべての座席から見えるようにした平面形態である。その客席平面はオルケストラ周りの客席は半円よりかなり大きく、かつパロドイ側の客席擁壁は舞台に平行な配置をなしている。このグループに対応するのが新しい分類基準で分類したC-④、D-④、U-④に属する客席平面である。

このグループに属するのはかなり少数で8例のみであり、ギリシア、トルコ、アルバニア、アフガニスタン、イラクにそれぞれ1例ずつ、そしてイタリアに3例である。つまり、事例数は比較的少ないが、北アフリカを除いて、イタリア以西の地に散在していることが見て取れる。また、建設時期を見ると、紀元前4世紀に2例、紀元前3世紀と紀元前2世紀にそれぞれ3例ずつであり、紀元前4世紀という比較的早い時期から少数であるが使われていた平面形式であったことが読み取れる。

現存遺構で見ると、紀元前4世紀のギリシアのドーナ Dodona の客席(図10)ではオルケストラの円を舞台に平行な線で1/3ほど切り取った残り部分の形をなしており、紀元前2世紀後半に作られたと見られるピエトラアッボンダンテ Pietrabbondante の客席ではU字形でパロドイ側の客席擁壁は舞台と平行な配置をなしている。

表1

中心角	～200°	201～210°	211°～	合計
事例数	14	6	2	22

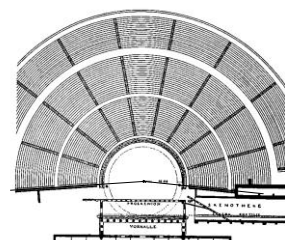


図8 メガロポリスの劇場

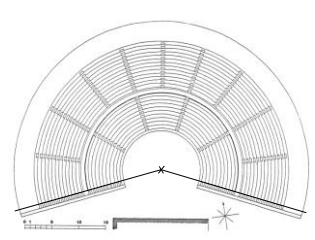


図9 カネアの劇場

第3グループの客席平面はオルケストラに面する客席面積をできるだけ広く確保しつつ、オルケストラ空間へ意識をより集中させるためにそこを囲むが、舞台の見やすさもある程度確保したい意図を持つ。その結果、オルケストラをある程度囲むが、客席の両端部近くで、しかも上段に近い座席部分の一部には舞台が見えにくい部分

が残る欠点を持っている。その客席平面は半円よりかなり大きくオルケストラ部分を囲むようになり、パロディ側の客席擁壁は舞台に対して緩やかに斜めの方向に延びている。本稿で提案した平面分類のC-②、C-③、D-②、D-③、U-②、U-③に属する客席平面である。分類の丸が込み数字はパロディ側の客席擁壁の配置の状況を示しており、②より③の方がより舞台に平行な向きに配置されていることを示している。

このグループに属する現存遺構は24例確認でき、第1グループとはほぼ等しい事例数を確認でき、全分析対象数の約1/4を占めている。地域的にはギリシアに9例、トルコに7例、イタリアに6例であり、ヘレニズム期に劇場が多く作られた地域にほぼ均等に分布している。また作られた時期を見ると、紀元前4世紀に4例、紀元前3世紀に5例、紀元前2世紀に6例、紀元前1世紀に1例、ヘレニズム時代に1例であり、紀元前4世紀の時期から各世紀において作られ続けた平面形式であったことが確かめられた。

このグループにはギリシア・ヘレニズム時代の代表的劇場としてしばしば取り上げられてきたアテネのリュクルゴス時代のディオニソス劇場(図11)やエピダウロスの劇場が含まれる。また紀元前200年頃作られたと見られるトルコのAssosの劇場や、紀元前2世紀前半建設の第1期のポンペイの大劇場の客席なども含まれる。このように現存する遺構数が第1グループにほぼ等しいほどの多くの現存遺構を占め、このギリシア・ヘレニズム期を代表する劇場のほとんどがこのグループの客席平面である。つまり、我々のギリシア・ヘレニズム期の劇場の客席の平面のイメージを形成しているのがこのグループが示す客席平面ともいえる。

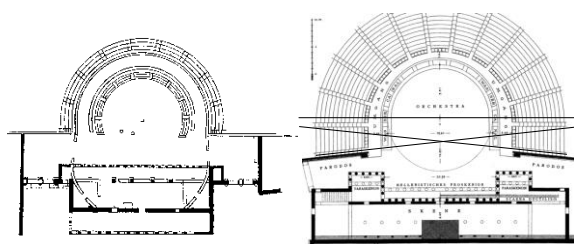


図10 ドドーナの劇場

図11 アテネの
ディオニソス劇場

このグループの客席平面においては、オルケストラに面する客席の広さをどの程度にするのが平面の形態を決定する上でひとつの重要な要素となる。なぜならオルケストラに面する客席面積を少なくすると第1グループの平面に近くなり、舞台建築をオルケストラ近くに配置

することができる。逆にオルケストラに面する客席部分をできるだけ広くとろうとすると、第4グループの平面に近くなり、舞台建築はオルケストラから遠ざかる位置に配置される。

そこでこのグループに属する24の客席において、オルケストラに面する客席の大きさを比較するために、第一グループの際と同様に、両側の客席最下段とオルケストラの中心を結んでできる2本の線のオルケストラ側の角度を表2にまとめた。このグループの客席は半円よりすべて大きいので、ここで求めた角度は常に180°以上であり、その角度が大きいほどオルケストラを囲む長さが長くなり、客席は広くなる。

この表2より、ひとつの円の円弧からなるオルケストラ周りの客席、異なる曲率の円弧を組み合わせた客席、そしてU字形平面の客席という順番にその角度が大きく、つまりオルケストラに面する客席は広がっている。オルケストラの周りの客席平面がひとつの円弧からなる6例の場合には、すべてその角度は210°以下であり、その中の4例は200°以下である。異なる曲率の円弧を組み合わせた8例の場合には、その中の6例は210°以下であり、半数の4例は201°～210°の間にある。最後のU字形平面の場合には、その角度が最も多いのが211°～220°であり、6例であった。さらにその角度が大きくなり、結果として下記に述べる第4グループに近いような3例も見られる。それらの客席では最下段の客席両端部とオルケストラの中心を結んだ線がなす角度を検討するとOenoandaで約248°、Cadyandaで約238°、Caunusでは約237°であり半円を大きく超えた円弧をなし、オルケストラを囲む意識がかなり強い。さらに、パロディ側の客席擁壁はオルケストラの中心に向かう方向よりも若干舞台に平行な方向に偏る向きになっており、オルケストラに面する客席面積を少しでも広くしようとする意図が見える。

表2

中心角	事例数			合計
	客席平面タイプ			
	C-②+C-③	D-②+D-③	U-②+U-③	
～200°	4	2		6
201～210°	2	4	1	7
211～220°		1	6	7
221～230°		1		1
231～240°			2	2
241～			1	1
合計	6	8	10	24

第4グループの客席平面はオルケストラに面する客席面積をできる限り広くとり、すべての観客のオルケストラ全体を見る事ができ、かつ観客の意識がオルケストラの中心に向かって集中することを目指すものである。そ

の一方で、パロドイ側の客席擁壁の向きが舞台正面に対して垂直方向側に近づくため、客席両端部は鋭角をなしがちで、結果として舞台をよく見るのできない座席がこの両端部においてかなり広さできてしまう欠点がある。本稿での分類法では C-①-(iv)、D-①、U-①、に属する。

このグループに属する現存遺構数はエフェソスの紀元前2世紀の第1期の客席(図12)など10例確認でき、イタリアに2例、ギリシアに3例、トルコに5例であった。建設年代を見ると紀元前4世紀に2例、紀元前3世紀に4例、紀元前2世紀に2例、紀元前1世紀に1例、ヘレニズム時代に1例であった。事例数が少ないため、地域的あるいは時代的な傾向を見だしにくい、少なくとも劇場が多く作られたイタリア、ギリシア、トルコの各地に存在し、かつ紀元前4世紀以降の時期に継続して使われていたことは確認できる。ここで注目すべき点は、現存遺構数の少なさが意味することである。すなわち、このグループの客席平面の建築的な特徴はオルケストラを取り囲むように多くの観客席をオルケストラの周りに配置し、すべての観客がオルケストラの中心に向かって意識を集中させる、まさしくオルケストラを中心として客席の平面計画であり、舞台の見やすさはある意味犠牲にされている。そうした建築的特徴を備えた客席がギリシア・ヘレニズム期の劇場であまり多く採用されていないことは、すなわち劇場においてオルケストラを見ることが全てに優先するという考えはなく、舞台を見ることがもある程度考慮されていた証左といえよう。

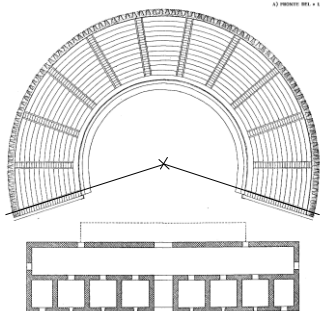


図12 エフェソスの劇場(第1期)

第5グループに属する客席平面は完全な半円からなる。すなわち、いわゆるローマ型劇場の平面と従来称されてきた平面である。このグループに属する現存遺構は9例確認できている。その9例はイタリアに6例と最も多く、残りの3例はギリシア、トルコ、アルバニアにそれぞれひとつずつ見いだすことができる。最古の例は南イタリアのメタポント Metaponto (図13)に紀元前4世紀に見いだせ、紀元前4世紀末～紀元前3世紀初めのギリシアの Ambracia に、紀元前3世紀後半～紀元前2世紀始めに

はトルコのペルガモンに確認できる。紀元前4世紀にはすでにこの半円形平面が使われていたこと、イタリアに現存遺構が多いもののギリシアやトルコなどその他の地域でも見いだせることが指摘できる。したがって、完全な半円形平面の客席は紀元前4世紀より存在し、イタリア以外の地でも散発的に存在していたことは明白である。

第6グループに属する劇場の客席平面は、すべて観客席からオルケストラと舞台の両方を見えるようにすることが最優先であり、一方ではオルケストラ周りの客席面積をできるだけ広く確保することはないがしろにされた平面形態である。その結果、客席平面は半円形つまり180°よりもその中心角が小さい扇形をなす。現存遺構でこのグループに属するのは紀元前4世紀に作られたタソス Thasos (図14)、紀元前3世紀初めのカソッペ Cassope、ヘレニズム時代建設のヘファイエスティア Hephaestia の劇場の客席である。すべてギリシアの地に作られているが、それら3都市はギリシア全土に散在しており地域的な繋がりはいくつか考えにくい。これら3つの客席平面は、演劇を見るという機能的観点からすれば、オルケストラ部分も舞台もすべての席から見ることができ、他の客席平面に比較して最も優れている。しかしながら、現存遺構に見る限り、紀元前4世紀から紀元前3世紀にわずか3例確認できるのみできわめて少数である。

このように、オルケストラも舞台もすべての席から無理せずに見える客席平面が紀元前4世紀に出現していたことは注目すべき点である。さらに、その例が初期の頃に数例にすぎないことは、オルケストラや舞台が全ての席から無理なく見えることよりも、オルケストラに面する客席面積をできるだけ広く確保でき、オルケストラ部分に観客の意識がより集中させる平面を持つ客席がきわめて重視されていたといえよう。

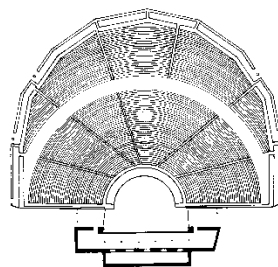


図13 メタポントの劇場

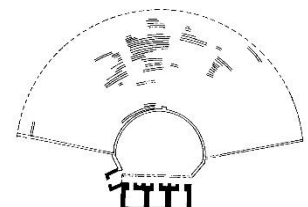


図14 タソスの劇場

[6]ヘレニズム期のギリシア劇場客席の特徴

図7を表示された様々なタイプの客席平面の相互の位置関係とそれぞれの平面の持つ建築的な特徴から以下の点が導かれる。

第1に、本稿で新たに定めた基準に基づく客席平面の

6つのグループに属する客席平面がすでに紀元前4世紀にすべて作られていたことである。このことは、オルケストラに円形の形態が紀元前5世紀頃に導入され、新たな客席の平面が形成され始めた紀元前5～4世紀というきわめて初期の段階においてすべての客席平面のタイプが存在したことを示す。さらに、その後において次々と新たな客席平面が造りだされた訳ではなく、紀元前1世紀の初めまでその平面が使われ続けた。ここで注目すべき点は第6グループの特殊形を除けば、他の5つのグループのすべてが紀元前4世紀～紀元前1世紀までに継続して使われており、時代的な変化というものが見当たらないことである。次に地域的観点から見ると第1グループにおいてのみイタリアに少ない傾向が見えるが、それ以外に特に地域的偏りは見いだせない。このことから、客席平面はヘレニズム時代に新たな創造を生んだのではなく、既存の形式の中から選ばれた選択の時代であったといえよう。

第2に十分な分析が可能であった77例の客席平面の中で第1と第3グループがそれぞれ23例と24例で他のグループに比較し圧倒的に多かった。この結果から次の2つのことが読み取れる。まずひとつ目は、従来のギリシア劇場の客席平面に対する一般的なイメージを若干変える必要を見せてくれたことである。これまでエピダウロスの劇場やアテネのディオニソス劇場の客席がギリシア・ヘレニズム劇場を代表するものとされてきた。しかし、その平面計形式に匹敵して、半円よりも大きく、かつパロイ側の客席擁壁そしてすべての階段状通路をオルケストラの中心に向けて配置するきわめて求心性の高い客席空間をもつ平面形式が使われていたことが現存遺構から立証された。

さらにこうしたオルケストラの中心に対して観客の意識を集中させるような意図がヘレニズム期の劇場客席で重視されていたことが、第4グループに属する10例の遺構の存在によってより強く立証された。第1と第4グループに属する遺構は33例を数え、全グループの77例の4割強を占めることになる。すなわち、オルケストラ周りの客席平面がひとつの円の円弧、異なる曲率を組み合わせた円弧、U字形のいずれかであっても、パロイ側の客席擁壁はオルケストラの中心に向かって置かれ、その結果、客席の観客の意識がオルケストラの中心に向かうきわめて求心性の高い平面が紀元前1世紀初め頃までの劇場客席の平面の主流であったことが明らかとなった。

第3に、最も多く用いられた第1と第3グループの客席平面の分析を通して、この時期の客席平面を決定した最も重要な要因は以下の2点にあることが明らかとなった。ひとつはオルケストラに面する客席部分の広さであ

る。もうひとつは、観客にオルケストラを重視させるのか、それともオルケストラと舞台の両方を観客に意識させるのか、それら2つの項目のバランスの取り方である。換言すれば、この2つの要素をいかに取り入れるかによって、それぞれの劇場の客席平面が決定されていたとも言える。

そのことを第1と第3グループの客席の円弧状の広がり方に見ることができる。第1グループでは、ひとつの円からなる円弧でオルケストラ周りの平面が決定され、パロイ側の客席擁壁がオルケストラの中心へ向かっているため客席空間はきわめて求心性が高い。それに対して、現存遺構は表1に見るように、客席両端部とオルケストラの中心を結ぶ線がなす角度は半数が200°以下でほぼ半円に近い。つまり、求心性を残しながら、半円に近い平面にすることで舞台の見えにくい座席部分を減らそうとしている。これに対し、第3グループでは客席が半円より大きくなり、オルケストラに面する客席の広さをより広く確保することができている。その中にあってこのグループでは、表2に見えるように、席両端部とオルケストラの中心を結ぶ線がなす角度は最大でも220°に満たないような客席平面がほとんどの現存遺構に当てはまる。

[7]まとめ

現存する93の遺構を対象にして、オルケストラに円形の平面が導入された以降から紀元前1世紀初め頃までの劇場の客席平面を、オルケストラ周りの客席の形態とパロイ側の客席擁壁の配置の仕方の観点から分析し、以下の結論を得た。

- (1) オルケストラの囲み方とオルケストラの中心に対する求心性の程度によって客席平面を6つのグループに分類でき、すべてのグループは客席平面が形成される初期の頃の紀元前4世紀に作られていた。
- (2) 紀元前3世紀から紀元前1世紀初め頃までの時期に客席の平面形式に大きな創造的変化はない。
- (3) この時期には2つの平面形式がほぼ同じ割合で最も頻繁に使用された。ひとつはU字形や楕円形平面で、オルケストラの中心と客席両端部の最下段とを結ぶ角度がおおよそ220°以下にパロイ側の客席擁壁を配置した平面である。もうひとつは半円をわずかに超える円弧からなり、パロイ側の客席擁壁がオルケストラの中心に向かう平面であり、これはオルケストラの中心に対してきわめて求心性の高い、いわば集中堂的な客席空間を作り出している。
- (4) この時期の客席が求めたものは、オルケストラに面する客席の広さを確保しつつ、オルケストラを中心

にした空間を重視し、その一方で舞台の見えにくい座席部分はより狭くすることであった。

注：

1) 円形あるいは円弧状をなすオルケストラの導入の正確な時期を特定することはできない。しかし、多くの研究者のほぼ設定する時期は紀元前6から紀元前5世紀とみられる。この紀元前6から紀元前5世紀前半頃までの間で、円形のオルケストラに対応した円弧状の客席と直線状あるいはコの字形の客席が併存していたとみられる。Sokolicek, A., Form and function of the Earliest Greek Theater, in Frederiksen, R, Gebhard, E. R. and Sokolicek, A. ed., The Architecture of the Ancient Greek Theater, Bristol, 2015, pp. 97-104, Junker, K., Vom Theatron zum Theater. Zur Genese eines griechischen Bautypus, Antiken Kunst, vol. 47, pp. 10-33, Bieber, M., The History of the Greek and Roman Theater, Princeton, New Jersey, 1961, pp. 54-57, Isler, H. P., Ancient theater architecture, in Rosseto, P. C. e Sartorio, G. P. ed., Teatri greci e romani, Roma, 1994, vol. 1, pp. 86-96. など。

2) 拙稿、ギリシア・ローマ劇場の客席の平面形態について、東海大学産業工学部紀要、第3巻、2010年、pp. 19-26。

3) Dörpfeld, W. & Reisch, E., Das Griechische Theater, Athens, 1896, pp. 169-172, Fiechter, E., Die Baugeschichtliche Entwicklung des antiken Theaters, München, 1914, abb. 57-62, Dilke, O. A. W., The Greek Theatre Cavea, in BSA, vol. 43, 1948, pp. 130-142, Bieber, M., The History of the Greek and Roman Theater, Princeton, New Jersey, 1961, pp. 70-73, Dinsmoor, W. B., The Architecture of Ancient Greece, New York, 1973, p. 245, p. 247, pp. 316-317, Mitens, K., Teatri greci e teatri ispirati all'architettura greca in Sicilia e nell'Italia meridionale c. 350-50 a. C., Roma, 1988, pp. 33-39.

4) Rosseto, P. C. e Sartorio, G. P. ed., Teatri greci e romani, Roma, 1994, 3 vols. の中のそれぞれの劇場の記述において、180°以上の角度で開く扇形の客席平面について、ひとつの円の円弧からなる場合（メガロポリス）と異なる曲率の円弧を組み合わせた円弧の場合（エピダウロス）をともに半円以上の円弧からなる客席として同じ範疇のものとして記述されている。またミーテンスは（Mitens, K., op. cit., 84-187.）その遺構のカタログの中の記述では、半円以外のU字形も異なる曲率の組み合わせによる円弧もすべて馬蹄形として取り扱われている（たとえば p. 93, 97, 118, 126.）。

5) Frederiksen, R., Typology of the Greek Theatre Building in Late Classical and Hellenistic Times, in

Proceedings of the Danish Institute at Athens, vol. 3, pp. 135-175.

6) Bressan, M., Il teatro in attica e piloponneso tra età greca ed età romana, Roma, 2009, pp. 26-28.

7) Vitruvius, M. P., De architettura, V. 7, 1-2.

8) この劇場ではオルケストラの描く円に接するようにしてスケーネが配置されているが、実際にはそのスケーネの前に可動式のプロスケニオンが置かれたと見られているので、客席両端部の上段の座席からはかなり首を捻って見ないとプロスケニオンは見えにくい状況にある。

（Fiechter, E., Das Theater in Megalopolis, Stuttgart, 1931, pp. 14-17.）

図版出典：

図1: A. Von Gerkan und W. Müller-Wiener, Das Theater von Epidauros, Stuttgart, 1961, taf. 12. に筆者が加筆。

図2: Bieber, M., op. cit., Fig. 231.

図3: Dilke, O. A. W., op. cit., Fig. 5.

図4: Bressan, M., op. cit., Fig. 10.

図5: ウィトルウィウス、ウィトルウィウス建築書、森田慶一訳注、東海大学出版会、1992年（第3刷）、第18図。

図6: 筆者作成

図7: 筆者作成

図8: Bieber, M., op. cit., Fig. 276. に筆者が加筆。

図9: De Bernard Ferrero, D., Teatri classici in Asia Minore, Roma, 1969, vol. 2, Tav. 24 (B). に筆者が加筆。

図10: Rosseto, P. C. e Sartorio, G. P. ed., op. cit., vol. 2, p. 200.

図11: Dörpfeld, W. & Reisch, E., op. cit., Taf. IV. に筆者が加筆。

図12: De Bernard Ferrero, op. cit., vol. 2, Tav. VII (B). に筆者が加筆。

図13: Rosseto, P. C. e Sartorio, G. P. ed., op. cit., vol. 2, p. 500.

図14: Ibid, p. 303.